人麻呂の歌

浜田　道雄

万葉集に多くの名歌を残し、「歌聖」と讃えられる柿本人麻呂の歌のなかでも

　ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかえり見すれば月かたぶきぬ

はとくに秀歌として知られている。軽皇子が安騎の野に狩りして夜を明かした朝、夜のまさに明けんとする一瞬の雄大な風景を捉えた絶唱であり、人々は称賛してやまない。

万葉集では万葉仮名が使われており、この人麿の歌も

　東野炎立所見而反見為者月西渡

と書かれている。

だが万葉仮名の「読み」は平安時代にはもうまったくわからなくなってしまっていた。それゆえいまでは奈良時代の人々が、この歌をどのように詠んだかを正しく知る方法はない。先の「読み」も江戸時代後期に国学者賀茂真淵が提唱したものだ。彼より前にも多くの学者が提唱したいくつかの違った「読み」がある。そのなかで馬淵以前にはこの歌は

　あずまののけぶりのたてるところみてかえりみすればつきかたぶきぬ

と読むのが通説とされていた。

しかし真渕の「読み」は明治以降多くの国学者に支持されるようになり、いまでは「定説」として教科書にも取り上げられている。だがこれにも問題がないわけではない。

この読みは「古代語の用法を無視したものだ」という批判が主に訓詁学者の間にあるのだ。「ひむがし」という言葉は和歌で使う「雅語」ではなく、万葉集にもその用例はほとんどないという。また「かぎろひ」は「燃ゆる」や「春」にかかる「詞」であって、これを単独の名詞として使ったり、「立つ」につなげたりする用法は古代にはなかったという批判である。

またどちらの「読み」も「月西渡」を「月かたぶきぬ」と読んでいるが、句頭の「東野」を「ひむがし」と読むなら、「西渡」は「にしわたる」と読むべきだという批判もある。

人麻呂が万葉仮名で書かれたこの歌を本当はどう詠ったのか。いまではそれを知ることが出来ない以上、彼の歌の「読み」はそれを提唱した人の「解釈」ないしは「翻訳」だと考えてもいいのではないか。

つまり人麻呂の「ひむがしの」の歌が「秀歌」と讃えられるのは、真渕の「翻訳」が素晴らしいからなのだ。訓詁学者の批判など気にせずに素直にこの歌を鑑賞すればいい。私はそう思っている。

（二〇二三・一二・二八）